中国—政治・政治史

加々美光行

はじめに

中国政治は1976年10月のいわゆる「四人組」失脚政変および78年末の中共第11期3中全会による「開放自由化」政策への転換に示されるように，激しい変化をこの間経験してきた。この激変は当然ながら日本の中国学の世界に衝撃をもたらしたが，とりわけそれまでいわゆる毛沢東思想やら文化大革命やらを肯定的に評価してきた論者たちの動揺は著しかった。本稿が扱うのはちょうどこの転換期に当る1978年から今日に至るまでの時期の研究動向である。紙幅の関係から，ここではこの時期の全ての著作・論稿を網羅的にとり上げることは到底できないので，対象を中国のこの間の激変にかかわって新たな問題提起をしたものに基本的に限定するが，それによって対象から除外されるものに学術上の貢献がなかったわけではない。この点で大方の御寛恕を願うほかはない。

I　研究の主体性

この間の中国政治の激変は，従来毛思想や文革に批判的であった論者たちによる中国学批判，とりわけそれまで毛思想や文革を肯定，讃美してきた中国学の主潮流に対する激しい批判を呼び起こした。中嶋嶺雄〔55，56〕，丸山昇〔75〕，西義之〔65〕，永井陽之助〔53〕，辻村明〔48〕，野沢豊〔66〕などによる批判がそれである。これら諸氏の批判はおおむね，従来の中国学の主潮流が中国の現状に対する客観性を欠いた主観的な「想い入れ」による認識の歪みを持っていたとして批判する点で共通していた。けれどもこの間の問題は中国学における主観的偏向としてだけで片付けうるほど単純ではなく，むしろ中国学における研究者の主体性の問題に深くかかわっていた。

一般にこの研究者の主体性が反省的に問題にされる時，その考察はどうしても戦後の中国学の再出発さらには戦前の中国学の在り方にまで遡ってなされがちである。前記の諸氏のうち中嶋，丸山，野沢の3氏は精粗の差はあるものの，いずれも研究者の主体性の在り方を時間的に文革期間にまで遡って問題にした点でその他の批判よりは比較的内在的な批判という要素を持っていた。

それではかつて毛思想や文革を肯定し讃美した論者たちは，こうした中国政治の激変や中嶋らの批判に直面してどう対応したのか。中嶋らの批判に言及する前に，この点に若干触れておかねばならない。

基本的にかれらの大多数は当初沈黙に終始した。そのなかでもっとも早く口を開いたのは新島淳良〔60，61〕であった。新島は自からの過去を

ふり返って，自身がどのように毛思想に呪縛されてきたか，またその呪縛がどのように解かれてきたか，そして呪縛が解かれたあとに毛沢東と中国がどのように見えてくるかを明らかにした。新島の議論は中嶋らの批判と同時かむしろそれに先行して発表されたが（1979年），批判者たちはいずれも新島の議論を無視した。恐らくその理由としては，新島の議論が学術性に欠けていたこともあるだろうが，それ以上に，新島が1970年の『毛沢東最高指示』（三一書房）の刊行以来，学問研究から身をひいたため，今日その議論がかつてほどの影響力を中国学の世界に持ち得なくなっていた点を指摘しえよう。

その後かつての毛思想・文革礼讃者の側から新島の観点とあい似た議論が現われたのは，やっと1983年に入ってからのことであった。中岡哲郎の論稿〔54〕と，小島晋治，新島淳良，吉田富夫，石田米子の4氏による座談記録〔27〕などがそれである。かれらの議論に共通しているのは文革当時のかれらの毛思想と文革に対する「想い入れ」が，中国の状況を日本の状況と切り離してはとらえ得ないというかれらの主体性重視の姿勢に発したものとする点である。それのみならず，かれらはこうした主体性重視の姿勢を部分的に誤りを含んでいたとしつつも，なお今日全面的に否定はしないとする点でも共通している。

たとえば石田は前記座談記録〔27〕のなかで，一世代下の若い研究者たちが日本の状況など全く不問に付したうえで，徹底して実証主義的に対象としての中国に分析を加える方法をとりつつある点を指摘し，自分にはそんな風にやる気は起きないと述べている。これに応えて，吉田は自分らの世代においては，日本社会の現状が一貫して新しい人間の創造を希求させるほどに矛盾を孕むものであり続けたとし，それこそがまた中国革命のなかに新しい人間の創造可能性を夢見る自分たちの心情を生みだしたとする。そのうえで一世代下の研究者たちは，日本社会の現状を肯定的にみる姿勢が強いために，これを不問に付したまま中国を実証的に扱えるのではないかと指摘する。

こうした論点は確かに中嶋〔55，56〕，丸山〔75〕，野沢〔66〕らの批判の不備を突いている面があった。既述のようにこの3氏は批判に当って，なるほど研究者における主体性の在り方を問題にはした。けれどもそれは一般に研究者の過去の実践における「敗北」に焦点を置いた過去的なうしろ向きの主体性を問題にしえただけで，文革当時，日本の現状に対して現在進行形的に発揮された主体性については，必ずしも十分な批判を展開しえたとは言い難かった。つまりかれらは戦時体験を通じて生じた中国侵略の「戦争加担」による贖罪意識とか，あるいは60年安保の「革命的敗北」による挫折意識とかに規定された主体性についてはかなり有効な批判を展開しえたと言ってよい。むろん具体的個人にあってはこの種の贖罪・挫折意識だけでその主体性が規定され切るはずがなく，何ほどか日本の現状の変革に意欲を抱くのが通例だが，にもかかわらず批判者たちが指摘するように贖罪・挫折の意識は中国に対する期待・希望を介して迂回的に日本の現状を批判する傾向へとその個人を陥れるものだった。けれどもこうした批判はたとえば竹内好や新島〔60，61〕，中岡〔54〕など日本の現状に対する現在進行形的な実践主体性の強い人びとには必ずしも当らないものだった。まして石田や吉田のように戦時体験の希薄な世代でしかもこの種の現在進行形的な主体性が強い者にはなおさら当らないと言えたのである。そこでは日本の現状に対する現実感覚がそれ

なりに中国の現状に対する夢想性に歯止めをかける力になっていたからである。現に70年安保に向けて新左翼のあるセクトのイデオローグでもあった新島の場合，1969年の九全大会の時点からすでに中国の現状に疑念を持ち，それが新島をして翌70年に既述の『毛沢東最高指示』の刊行に踏み切らせ，結果的に中国学の世界から身をひくことになったのだった。

とはいえ，こうした人びとの中国認識にも確かに一定の歪みがあった。それは何によるのか。一言でいえば，それはかれらの大衆信仰とも言えるような大衆認識にあったとわたくしは考える。前もって言っておくと，この種の大衆イメージはかつては極端な中国批判派を除けば，主体性のいかんやその有無によらず，研究者の大半にとって百篇に近いプラス・イメージとして存在した。実践主体的な思想傾向を持った論者はとりわけそう言えたのである。ところが今日ではこの大衆イメージが急速にマイナス的なものに変化し始めている。それは何故か。以下検討しよう。

II　大衆信仰

はじめに比較的従来どおりのプラスの大衆イメージを維持している論者から紹介しておこう。その典型は宍戸寛〔39〕，小島晋治〔25〕，中屋敷宏〔59〕，小田実〔19〕，今堀誠二編〔11〕などの論著である。

これらの論者に共通して言えることは，「物言わぬ，声なき」農民大衆こそが歴史の基底にあって歴史を推進する主体であるとみる点である。このような観点に立つかぎり，晩年の毛沢東や文革の誤りは，毛を始めとする政治指導者たちがそうした農民大衆の生(なま)な現実とその苦悩の実相を看過したことにあり，このかぎりで農民大衆には何ら責任はないと考えられることになる。

たとえば，中屋敷〔59〕と今堀編〔11〕とでは，村落共同体の実質について，前者が少なくとも春秋戦国期から共同体の実質が失われてきたとするのに対し，後者ではその実質がむしろ歴史通貫的に維持されてきているとするなど，明白な対照をなしている。しかしそれでいて両者とも共同体を指向する農民大衆の意識の一貫不変性を前提し，そこから同じく歴史不変的な中国的民族イデオロギーないし民族主義がもたらされてきたとする点，またそのような農民大衆の意識を肯定的にみる点で一致しているのである。

前記の座談記録〔27〕に即して言えば，小島のほか石田も農民大衆をプラス・イメージでみている。このため石田は従来の中国礼讃的な諸研究の欠点は農民大衆の生活の実相に肉迫しないところにあったと指摘し，天野元之助の研究に代表される戦前の農村研究を再評価すべきだとした。ところがこれに対し吉田富夫はその種の大衆の生活の実相などしょせん判らないしまた判らなくてよいと断じたのである。吉田の真意は，大衆の生活の実相なるものは，どれほど研究しても研究者によって描かれるイメージが終に異なるものとならざるを得ないこと，しかもその結果研究者は互いに異なる大衆イメージをぶつけ合って攻撃し合うような一種のリゴリズムを依然持っていること，を指摘したかったのだ。

この吉田の言明は，かれ自身が大衆イメージをプラスともマイナスとも断定しえない混沌としてイメージしていることを示しているように思う。結局それは大衆を常に対象としてのみとらえようとする姿勢を拒否し，むしろ自己の内にも観念（たとえばあるべき社会主義の理念）や理念を超えて

「生きられるがままに」生きるほかのない一種の「大衆性」があることを実感した者が抱く大衆イメージである。この点で吉田と新島はきわめて似たものを持っている。このような混沌としての大衆イメージは文学的表現にはなりえても，学術的なテーマにはなりにくい。

とはいえ大衆がいかに混沌としてイメージされようとも，なおかつ大衆を肯定し信頼するというのが本来毛沢東的な大衆路線・大衆運動の在り方であった。竹内好もまた同じ意味で大衆を信頼していたと言えるだろう。吉田や新島が毛や竹内と異なるのは，大衆を混沌としてイメージしたうえで，もはや無前提に大衆を肯定・信頼することを止めようとしている点である。

吉田や新島に代表される大衆イメージの変化は他の論者にも多くみられる。たとえば既述の中岡〔54〕のほか，野村浩一〔69〕，加々美光行〔21〕，船橋洋一〔73〕，西倉一喜〔62〕，辻康吾〔47〕，矢吹晋〔80〕などがそうである。

このうち大衆の混沌イメージをなおも理論化し，これを政治体系の動態把握に役立てようとする傾向を一番強く持つのが野村である。理論化への志向は次いで中岡にも比較的みられるが，船橋，西倉，辻にはその種の理論化志向がほとんど見られない。とはいえ他の諸氏に比して野村，中岡の両氏には大衆の個別具体的な現実に深く分け入る径路が充分用意されておらず，それがかえって両氏の理論化志向を強めている面は否めない。

これに対し船橋，西倉，辻の3氏はいずれも新聞記者（ジャーナリスト）であり，もっぱらみずから直接見聞した大衆の個別具体的現実を混沌のままに提示する結果となっている。とはいえそのなかでは西倉が自己の提示した大衆イメージの個別性にもっとも配慮し，安易な一般化を避けようとする姿勢が強く，次いで船橋もそうした傾向を有しているが，辻の場合はむしろ大衆イメージの一般化を試みる姿勢がみられる。この3氏の間の違いは，一言でいえば，大衆の現実に対する衝迫力の差であり，現実への接近度が高いほど，個別性がより意識されることを示している。いずれにせよ，この3氏の著作は中国政治の学術的研究にとって重要な素材を提供したものと言えるのだが，そのくせ今なお学術研究に有効に用いられたふしがない。それは何故か。

その理由の第1は，文革期以後の中国政治に関する学術研究そのものが貧困をきわめていることが指摘される。理由の第2は3氏の提供した素材によっては混沌とした大衆イメージしか与えられないということがある。逆に言えば，文革以後の中国政治について学術研究が進まないのは，この時期の大衆の現実が混沌としか見えないからではないかと思われる。混沌を混沌のままにとらえつつ，しかもこれを理論化することは実はきわめて困難なことなのだ。

この問題をもっとも早く提起したのは山田慶児の『混沌の海へ』（筑摩書房　1975年）にほかならなかったが，山田はその後中国政治の現状についてかたくなに沈黙を守っている。市井三郎は山田のこの問題意識に触発されて，1981年に加々美と山口一郎の呼びかけで開始したアジア経済研究所の文革研究会に参加し，その理論化を「カオスの理論」として定式化しようと試みたが（「数学的カオスの理論」〔『理想』1981年5月号〕），理論上の壁にぶつかるうちに病に倒れ挫折している。

加々美はこうしたなかで大衆の混沌イメージの現実把握と，その理論化による中国政治動態の体系化とを試み，とりわけ文革政治についてこれを「情念国家」ないし「コミューン国家」の崩壊過

程として定式化しようとしているが，なおその作業は完了していない〔22，23〕。

大衆を混沌イメージでとらえる論者たちにとって，もっとも大きな困難は，大衆の草の根的な生活・生産の同一の実相が，ある時にはプラス・イメージでとらえうるような働きをするかと思うと，別の時にはマイナス・イメージでしか評価し得ない働きをするという点にあった。理論化への努力はこの点で挫折を強いられる。たとえば中岡〔54〕は中国農民大衆の生活・生産の基底に流れる「緩慢な時間の流れ」（蓄積を重視した時間意識）を文革期には最大限に評価し，「土に刻む」古来の土法技術はその種の時間に支えられるとみていた。ところが今日大型プラントの導入が始まり，近代プラントが内包する「高速の時間の流れ」に農民大衆の「緩慢な時間の流れ」がついてゆけず，たとえば本来短期の減価償却を要求する近代機械に対し50年以上もの償却期間を置く非効率がまかりとおることに中岡は批判をぶつけている。反面中岡は欧米社会の大衆が「高速の時間の流れ」（フローを重視した時間意識）を持つことのマイナスを十分批判してもいるのである。野村〔69〕の場合も大衆イメージのマイナスとプラスの間の揺れを，「群衆」と「観衆」との間の動揺として把握しようとしているが必ずしも十分説得的とは言えない。

こうして中国政治に関する学術研究は，文革期以後の政治を避けて文革期以前に，多くの場合は解放前にその対象を遡る傾向がある。なぜなら時期を遡ることによって，大衆イメージは混沌としてではなく，より秩序性を持ったものに変わるからである。つまり大衆は中国の政治社会を戦乱のカオスから解放と革命の成功へと新たな安定秩序に向けて収斂する力として把握できるように見えるからである。これに対し大躍進から文革を経て現在に至る期間については，大衆イメージがむしろ安定秩序をカオスへと拡散する力として見えるのであり，それゆえ今日の課題は大衆の自発性をむしろ抑えて，これをいかに「近代的」秩序に適合的なものに教育し直すかといった議論，つまり大衆のなかに歴史を推進する力量があることをもはや認めない議論が有力になっているのである。

今日のこうした研究動向は，戦後日本の中国学の潮流がこれまで一種の大衆信仰の呪縛によって規定されてきたこと，今日なおその呪縛が十分に解かれていないことを示している。

Ⅲ　実証的な政治・政治史研究の成果

以上の考察から判るように，今日では大衆信仰の呪縛が比較的弱い研究者こそ，大衆がカオスに向って中国政治を揺り動かした大躍進期や文革期の動態を扱いうる条件を具えているはずである。だが残念にもかれらはこの両時期をほとんど対象としないか，あるいは対象としても大衆の草の根的現実に対するミクロな分析と結びつかない形のマクロな政治分析によって，中国政治の通史の類型的把握を目指す傾向を見せている。こうした例としては岡部達味編〔17〕，衛藤瀋吉編〔16〕，平松茂雄〔71，72〕，高木誠一郎〔41～43〕，石井明〔8〕，徳田教之〔50，51〕，猪口孝〔9，10〕などを挙げうるであろう。

こうした研究は，一般に大衆の現実を分析対象から外しうる分野，たとえば軍事・外交・党内闘争といった領域に分析を集中したものが多い。むろんそこに見るべき成果がないわけではない。しかしこれらの領域であっても，元来は大衆の現実

の動態と関連づけた分析を行なうことによってその内容を豊富化しうるのは当然である。だからこれらの諸氏のなかに大衆的現実に対する関心が全く欠如しているわけではない。なかでも徳田〔50, 51〕は過去に毛沢東研究の蓄積があるためか大衆的現実に対する関心はもっとも強いと言えるが，それでも文革期を対象から外し，毛の死以後のみを扱っている。のみならず1930年代から40年代にかけての「毛沢東主義」についての徳田のかつての分析が大衆と党とを政治過程のなかにダイナミックに位置づける視点を失っていなかったのに対し，76年秋以後の毛の権威についてのかれの分析には大衆レベルの問題が視野から欠落している。結局これら諸氏をもってしても大躍進期や文革期の大衆の現実はやはりとらえどころがないのかも知れない。

これら諸氏の研究と距離的にきわめて近いところにあって，しかも過去中国学の大衆信仰の呪縛がかかった潮流にも近いところに位置してきた論者として，宇野重昭〔14, 15〕，毛里和子〔76～79〕，姫田光義〔70〕，安藤正士〔6〕，などを挙げることができるが，これら諸氏もこの間いくつかの現代中国に関する論稿を発表している。

このなかでは毛里が一貫してこの種の大衆の現実に迫るミクロ分析の視点を維持し，とりわけ少数民族問題の領域で過去きわめて高い水準の成果を上げてきているが，その毛里にしても大躍進期と文革期についてはマクロ的経済分析の手法をとる傾向を見せている。付言しておけば文革期後の少数民族問題については佐々木信彰〔37, 38〕が系統的にとり上げている。一方，姫田の場合にはかなり早くから林彪事件を始めとする文革期のテーマを扱い，今日でも文革に対する問題関心を失っていないが，その視点にはかつての解放前国民革命期の中国ソヴィエト研究でみせたような大衆レベルのミクロ分析が全く欠落し，むしろ徳田の最近の分析に近いものになっている。宇野の分析にも同様の特徴があり，やはりマクロ分析にとどまっている。

文革期を中心とした中国の現代政治の研究は，こうしてきわめて少数に限定されるが，そのうえに多くの場合，姫田の分析にみられるような限界が克服されていない。たとえば蔵居良造，江藤数馬らの諸氏によって1977年から78年にかけて行なわれた文革に関する共同研究〔49〕にも同種の限界が明瞭に看取できる。これに比した場合，柴田穂の文革に関する著作〔40〕は体系性を欠いていて学術研究とは呼べないものの，実際には自身の見聞に加えて相当量の文献資料を駆使した跡があり，しかも各所に大衆レベルのミクロ的事実について推測を混えた記述が散りばめられていて読みごたえがある。文革研究の素材として今後とも貴重なものとなるだろう。

とはいえ柴田の眼は基本的に観察者の眼以上のものではない。これに対し中国社会の内側にその社会の大衆の一人として生き，そこから文革政治を含めた現代中国政治を，体験にもとづくミクロ的な視点によって記述したものとして，西条正〔35, 36〕，山本市朗〔83〕の著作がある。

いずれも学術的なものではないが，これによって文革政治に内在する数多くの謎を解く鍵が与えられた。加々美〔21～23〕，渡辺一衛らは，西条の著作に啓発されて文革をテーマとしたグループ研究を試み，大衆レベルのミクロな現実がどのように文革政治のマクロな動態に結びつくかの分析を追求している。現在のところ他にはこのような試みは見られない。

以上が文革政治の研究の概要である。

最後に，やはり大躍進期や文革期を対象から外しはするものの，大衆信仰に呪縛されず，しかも大衆の草の根レベルの現実を徹底して実証的に分析し，それを通じて政治過程の分析に到達してゆく方法で一貫している研究者たちの成果を紹介しておきたい。そうした成果のなかには石田米子や吉田富夫が前記の座談記録のなかで実証主義に偏していると評した比較的若い世代の研究も含まれている。たとえば小竹一彰〔29〕，天児慧〔1～3〕，内田知行〔12，13〕，西村成雄〔63，64〕，小島朋之〔28〕などによる研究がそうである。このほか小林弘二〔30〕や田中恭子〔46〕もこうした諸氏に混って成果を上げている。このうちでは小島と小林が大躍進期や文革期に近い時期の分析を始めている。これらの人びとが困難ではあってもできるかぎり文革期の分析を行ない，当時の混沌ともみえる大衆の現実に分析のメスを入れてくれることを希望したい。

このほかの研究動向としては是非次の点に触れておかねばならない。すなわち，昨今の中国の開放自由化政策の展開を反映して，清末・民初，1920年代までの時期にヨーロッパ文化の受容と中国伝統文化の革新に努めた人物や運動について，中国側からその再評価がなされると同時に関連の文献資料が数多く公開されるようになり，これに伴って日本でもこの時期の人物・運動について急速に研究が活発化している点についてである。辛亥革命，孫文，初期毛沢東，五四運動などを中心テーマとした研究がそれである。その成果は，小野川秀美・島田虔次編〔20〕，野沢豊・田中正俊〔67〕，中村義〔58〕，山田辰雄〔82〕，近藤邦康〔32～34〕，安藤彦太郎〔5〕，堀川哲男〔74〕，横山宏章〔84〕，池田誠〔7〕，野村〔68〕，中村公省〔57〕，永井算巳〔52〕，有田和夫〔4〕，高田淳〔45〕，狭間直樹を中心とした京大人文研グループ〔24〕，山口一郎〔81〕，小島晋治・丸山松幸〔26〕などの諸氏によって着々とあげられてきている。

おわりに

かつて文革期には，当面する動乱の文革政治をテーマとする研究が膨大な数存在し，他の経済，社会といった分野の分析も全て政治がらみの感があり，むしろ非政治的と呼べる分析を見出すのが困難なほどであった。

今日では状況は一変して，文革期およびそれ以後の中国政治をテーマとした研究は急減し，かわって経済分野に研究が集中するに至っている。ここには依然，逆の意味で文革期にみられたのと同質の判断，つまり対象である中国政治の在り方によって研究姿勢が動揺する多分に非主体的な情緒的判断が介在するとは言えないか。中国現代政治の研究に，より多くの研究者が今後参画されるよう希望して筆を措きたい。

〔文献リスト〕

〔1〕天児慧『政治転換期における大衆動向——1956-58年の『人民日報』投書欄分析を中心として——」（衛藤瀋吉編〔16〕所収）。
〔2〕天児慧『現代中国政治変動論序説』（現代中国研究叢書）アジア政経学会 1984年。
〔3〕天児慧『中国革命と基層幹部——内戦期の政治動態——』研文出版 1984年。
〔4〕有田和夫『清末意識構造の研究』汲古書院 1984年。
〔5〕安藤彦太郎『革命いまだに成功せず——孫文伝——』国土社 1981年。
〔6〕安藤正士「軍の近代化と政軍関係研究序説——文革期を中心に——」（衛藤瀋吉編〔16〕所収）。
〔7〕池田誠『孫文と中国革命——孫文とその革命運動の史的研究——』法律文化社 1983年。

〔8〕石井明「中国外交と『三つの世界』論」(『共産主義と国際政治』 第2巻第4号 1978年1・3月)。
〔9〕猪口孝『外交態様の比較研究——中国・英国・日本——』 厳南堂 1978年。
〔10〕猪口孝「中国のベトナム干渉——1789年と1979年——」(『アジア研究』 第27巻第2号 1980年7月)。
〔11〕今堀誠二編『中国へのアプローチ——その歴史的展開——』 勁草書房 1983年。
〔12〕内田知行「抗日戦争時期陝甘寧辺区における農業生産互助組」(『アジア研究』第27巻第1号 1980年4月)。
〔13〕内田知行「陝甘寧辺区における農業生産互助組——その模索と挫折——」(『日中学院創立30周年記念文集』 1982年)。
〔14〕宇野重昭「華国鋒体制の現段階——『四つの近代化』路線におけるイデオロギーの役割——」(『共産主義と国際政治』 第2巻第4号 1978年1・3月)。
〔15〕宇野重昭『中国と国際関係』 晃洋書房 1981年。
〔16〕衛藤瀋吉編『現代中国政治の構造』 日本国際問題研究所 1982年。
〔17〕岡部達味編『中国外交——政策決定の構造——』 日本国際問題研究所 1983年。
〔18〕岡部達味・佐藤経明・毛里和子編『中国社会主義の再検討』 日本国際問題研究所 1983年。
〔19〕小田実『毛沢東』(20世紀思想家文庫 15) 岩波書店 1984年。
〔20〕小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』 筑摩書房 1978年。
〔21〕加々美光行『資料・中国文化大革命——出身血統主義をめぐる論争——』 りくえつ 1980年。
〔22〕加々美光行編『現代中国の挫折——文化大革命の省察——』 アジア経済研究所 1985年。
〔23〕加々美光行編『現代中国のゆくえ——文化大革命の省察Ⅱ——』 アジア経済研究所 1986年。
〔24〕京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』 全3冊 同朋舎 1982～85年。
〔25〕小島晋治『太平天国革命の歴史と思想』 研文出版 1978年。
〔26〕小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』(岩波新書) 岩波書店 1986年。
〔27〕小島晋治・新島淳良・吉田富夫・石田米子「座談会＝いま，中国研究をふり返って」(『中国研究月報』 総421号 1983年3月)。
〔28〕小島朋之『中国政治と大衆路線——大衆運動と毛沢東，中央および地方の政治動態——』 慶応通信 1985年。
〔29〕小竹一彰『国共内戦初期の土地改革における大衆運動』(現代中国研究叢書) アジア政経学会 1983年。
〔30〕小林弘二「国共内戦期の互助合作化運動」(『アジア経済』 第23巻第3号 1982年3月)。
〔31〕小林弘二「大寨・典型・政治」(『アジア経済』第24巻第1号 1983年1月)。
〔32〕近藤邦康『中国近代思想史研究』 勁草書房 1981年。
〔33〕近藤邦康「楊昌済と毛沢東——初期毛沢東の『土哲学』——」(『社会科学研究』〔東京大学社会科学研究所〕 第33巻第4号 1981年11月)。
〔34〕近藤邦康「長沙時代の毛沢東——哲学・運動・主義——」(『社会科学研究』〔東京大学社会科学研究所〕第37巻第5号 1985年12月)。
〔35〕西条正『中国人として育った私』(中公新書) 中央公論社 1978年。
〔36〕西条正『二つの祖国を持つ私』(中公新書) 中央公論社 1980年。
〔37〕佐々木信彰「中国社会主義における“民族問題”——少数民族問題を中心に——」(『経済学雑誌』〔大阪市立大学経済学会〕 第80巻第5号 1980年1月)。
〔38〕佐々木信彰「中国における民族問題の復興」(河地重蔵編『中国社会主義の新動向』〔大阪市立大学編経済学会研究叢書 12〕 1982年)。
〔39〕宍戸寛『中国紅軍史』 河出書房新社 1979年。
〔40〕柴田穂『毛沢東の悲劇』 第1期全5巻 サンケイ新聞社 1979年。
〔41〕高木誠一郎「現代中国における権力の継承と政治的不安定」(『アジア研究』 第25巻第2号 1978年7月)。
〔42〕高木誠一郎「『国民経済発展10カ年計画要綱』の後退と因果関係の認識」(衛藤瀋吉編〔16〕所収)。
〔43〕高木誠一郎「中国の対外認識の展開(1972～1982年)」(岡部達味編〔17〕所収)。
〔44〕高木誠一郎・石井明共編『国際関係論のフロンティアⅠ 中国の政治と国際関係』 東京大学出版会 1984年。
〔45〕高田淳『辛亥革命と章炳麟の斉物哲学』 研文出版 1984年。
〔46〕田中恭子「内戦期の中共土地改革における『左傾

偏向』」(I)(II)(『アジア経済』 第22巻第3，4号 1981年3，4月)。
〔47〕辻康吾『転換期の中国』(岩波新書) 岩波書店 1983年。
〔48〕辻村明「朝日新聞の仮面——『論壇時評』の偏向と欺瞞をつく——(完結編)」(『諸君！』 1982年2月号)。
〔49〕東亜文化研究所編『中国文化大革命の再検討』全2冊 霞山会 1978，79年。
〔50〕徳田教之「毛沢東神話の変形——華国鋒政権下における継続革命論の転換をめぐって——」(『共産主義と国際政治』 第3巻第1号 1978年4・6月)。
〔51〕徳田教之「『四つの近代化』路線の政治的構図」(衛藤瀋吉編〔16〕所収)。
〔52〕永井算巳『中国近代政治史論叢』汲古書院 1983年。
〔53〕永井陽之助「反時代的考察の勝利」(『第3回サントリー学芸賞受賞者』 サントリー財団 1981年)。
〔54〕中岡哲郎『私の毛沢東主義「万歳」』 筑摩書房 1983年。
〔55〕中嶋嶺雄「『毛沢東批判』と日本の知識人」(『東京新聞』 1978年12月8日。のち同『北京烈烈 下』筑摩書房 1981年に収録)。
〔56〕中嶋嶺雄「日本の知識人にとって"いま毛沢東とは"」(『正論』1982年4月号。のち同『文明の再鋳造を目ざす中国』 筑摩書房 1984年に収録)。
〔57〕中村公省「毛沢東主義の原形」(加々美光行編〔22〕所収)。
〔58〕中村義『辛亥革命史研究』 未来社 1979年。
〔59〕中屋敷宏『中国イデオロギー論』 勁草書房 1983年。
〔60〕新島淳良『私の毛沢東』 野草社 1979年。
〔61〕新島淳良『歴史のなかの毛沢東』 野草社 1982年。
〔62〕西倉一喜『中国・グラスルーツ』 めこん 1983年。
〔63〕西村成雄「中国農業合作化論の転換点——1953年の歴史的意義——」(『大阪外国語大学学報』 第49号 1980年)。
〔64〕西村成雄『中国近代東北地域史研究』 法律文化社 1984年。
〔65〕西義之「日本の四人組は何処へ行った？」(『諸君！』 1981年3，4月号)。
〔66〕野沢豊「アジア研究の戦前・戦後」(歴史学研究会編『アジア現代史』 別巻 青木書店 1985年)。
〔67〕野沢豊・田中正俊編集代表『講座・中国近現代史』 全7巻 東京大学出版会 1978年。とりわけ第5巻まで。
〔68〕野村浩一「中国・1910年代の思想世界——『新青年』を中心に——」(1)(2)(『立教法学』 第23，24号 1984，85年)。
〔69〕野村浩一「80年代・中国の政治——社会主義と"開発独裁"の間——」(『中国研究』 創刊号 1985年秋季)。
〔70〕姫田光義「中国における後継者問題と路線闘争」(『共産主義と国際政治』 第2巻第4号 1978年1・3月)。
〔71〕平松茂雄『中国の国防と現代化』 勁草書房 1984年。
〔72〕平松茂雄『中国の国防とソ連・米国』 勁草書房 1985年。
〔73〕船橋洋一『内部——ある中国報告——』 朝日新聞社 1983年。
〔74〕堀川哲男『人類の知的遺産——孫文——』 講談社 1983年。
〔75〕丸山昇「文革における思想・理論・政治——四人組事件と中国研究——」(『現代と思想』 第28号 1977年6月。のち同『「文革」の軌跡と中国研究』 新日本出版社 1981年に収録)。
〔76〕毛里和子「中国をめぐる国境問題」(『共産主義と国際政治』 第3巻第1号 1978年4・6月)。
〔77〕毛里和子「中国の少数民族問題」(『国際政治』 第65号 1980年11月)。
〔78〕毛里和子「新疆の"地方民族主義"をめぐる問題，1957-59年」(『論集・近代中国研究』 山川出版社 1981年)。
〔79〕毛里和子「中国政治における『幹部』問題」(衛藤瀋吉編〔16〕所収)。
〔80〕矢吹晋『2000年の中国』 論創社 1984年。
〔81〕山口一郎「孫文の『大亜洲主義』と『亜洲大同盟』」(『中国文学会紀要』 第9号 1985年3月)。
〔82〕山田辰雄『中国国民党左派の研究』 慶応通信 1980年。
〔83〕山本市朗『北京三十五年』全2冊(岩波新書) 岩波書店 1980年。
〔84〕横山宏章『孫中山の革命と政治指導』 研文出版 1983年。

(アジア経済研究所調査研究部研究主任)